

北
京
峰



7月号
第5卷 第7号
通卷 第38号

涅槃

尊傳

への旅路

谷川善妙

舍利弗尊者の死	6	己れを灯とせよ	8
悪魔のいざない	9	三つの垢
大地震動の因	13	淳陀の家
宝城の瓦隣	16	バラモンの青年
瀧水の奇蹟	18	仏身放光
淳陀への思いやり	20	釈尊の学道
淳陀の死	21	天の奇瑞よりも
三宝常住	23	転輪聖王の葬儀
大地の恩	25	仏陀と共にいる者
我が子ラゴラよ	28	最後の仏弟子
スバドラの死	32	懺愧の衣
よき道案内者	35	一人行く者
最後の懺悔	37		

表紙題字・身延山法主藤井日静猊下
表紙写真・インドへ渡つた身延山金銅の釈尊像

釈尊伝

不ハンへの旅路

谷川善妙



申すまでもなく二月十五日は、
今よりおよそ二千数百年の昔、世

界の聖者とうたわれた大聖釈迦牟

尼世尊が、クシナガラ城外、沙羅

日蓮大聖人も、その教えの中に
臨終のことを悟りうて
後に他事を習うべし

と仰せられています。

そこで、自分自身の限られた命
迫り来る死、交通事故などで何時
たゞれるかも知れないはかない我

のも、お盆の月を迎えた仏教徒と
して意義あることゝ思います。

舍利弗尊者の死

双樹のもとで御入滅になられた聖

日であります。

人間、生きている以上、如何な

ニレンゼン河のほとり、菩提樹
の下で、三十五才にして悟りを開
かれてより、四十五年もの久しき

る高貴な人でも、死をまぬがれる

間、衆生をみることなお赤子の如

く、限りなき大慈悲心をもつて、

ことは出来ません。

荒漠たる的熱のインド中央大陸に
教化の大業をほどこされて来た釈尊は、世寿ようやく八十になんなんとして、マガダ国の首都王舍城外の靈鷲山（りょうじゆせん）に

仮つて来られました。

靈鷲山は釈尊一代八十年の間、

みずから本仏として、本仏の内証仏法を開頭された聖山でもあります。

そしてここより、今や入滅の時の近ずいたことを自覚された釈尊は、入滅の地へ向つて、最後の伝導の旅につかれたのです。

それは長い／＼旅路であり、ネ槃への旅路もありました。蓋しその旅路が、法華經を説かれた靈

鷲山より始つたということには、

深い／＼意義が秘められていたこととあります。

その順路は、およそ次のようでした。

王舍城靈鷲山 → アンバラツチ → ナーランダ → パーダ

リ村 → ガンヂス河を渡る→

ます。

然しそれでも、釈尊の十大弟子の中、智慧第一とうたわれていた

舍利弗（しりふ）尊者は、さすがに釈尊がみずから予告される

前に、既に釈尊の御入滅の時の迫つていることを察知して、釈尊の御入滅を見るに忍びず、三度も釈尊に向つて、釈尊よりも先き立てて滅度する許しを乞い願い、その

最後の教えを説き残され、別れを惜みながら旅をつづけられました

釈尊がみずから、入滅の時期の迫つているのを人々に告げられたのは、ガンヂス河を渡つた時のこ

とです。それより後の旅は、文字通り「ネ槃告別の旅」となっています。

↓コリ村 → ナダ村 → ビサ
タ → ヘルバ → シヤバラ
アンバ村 → エンブ村 →

クタ村 → クシナガラ城釈尊

は、行くさきごとに村中の人々から、或は町中の人々から、歎喜して迎えられました。そしてそこに

後七日の間に、故郷ナーランダの村なるマカサの生家に歸つて、法の如くにみずから滅度をとつています。

これより先き、舍利弗尊者と並び称せられていた神通第一の目蓮尊者は、既に竹林外道に撲殺され竹園にほうむられていきました。

釈尊はナーランダの村を過ぎ、ガンヂス河のほとりにおいて、かけがえもなきこの二大弟子の死を中心からいたまわれました。

恩師の死を見る悲しみに堪えられず、許しを乞うてみずから滅度して行つた舍利弗尊者の、師を慕う心もさることながら、消々たる恒河の絶えまもない不滅の流れを

まのあたりにしながら、とむらわねばならない二人の愛弟子のことを思うにつけ、みずからもネ槃の旅路にある老いた釈尊の胸中は、如何ばかりであつたことでしょう。

そこは、もはや再び踏むこともないマガダの国境でした。

釈尊の一行は、ガンヂス河の流れを北へと渡られました。こゝまで見送つて来たマガダの大臣兩行

は、この渡しを「ゴーダマ（釈尊の別名）の渡し」と名付けて、別離の悲しみを永遠に留めました。

この安居中、釈尊は劇しい病にかかり、死ぬほどの苦しみをうけました。然し、

「我が弟子たちは、四方に散つて

今こゝには居ない。弟子たちに滅度を告げず、最後の教えも説かず

にネ槃に入つてはならない。しか

おそれていました。釈尊は弟子達を四隣へ分散させ、阿難尊者と二人で、こゝに留まられました。

折しもインドは雨期に入り、釈

尊は成道後四十五年目の安居（あんご——伝道の旅をやめて一所で静かに修行すること）を迎えました。

はない」

として深く禪定に入り、定力によつて死に勝る病苦に堪え、寿命を留められたでした。

この時、阿難尊者は釈尊の病患に、はじめて直面し、天地も暗くなるほどの思いに沈みました。

然し間もなく恢復とみましたので、喜びのあまり、

「世尊よ、世尊は衆生に対して、何かを語りたまわぬ中は、決して入減されるはずはない、と思つていました。まさにその通りでした」

と申し上げました。

すると釈尊は、阿難尊者の喜びを静かにおさえながら答えら

れました。

「阿難よ、私は内外の区別なく法を説いて来た。私には、お前が何かというような秘密の法門は、奉（こぶし）ほども持っていない」また次のようにも諷められました。

「阿難よ、我が身は既に老い、我が旅は、もはや終りに近づいた。

齡まさに八十になろうとしている形は朽ちた車のようである……」

悪魔のいざない

「阿難よ、生死、時あり。生れて終らぬ者はない。私は世に出でてあまねく本業の大業を開き、生死無明の本を絶つた。汝は、我が逝（ゆ）きたる後も、私の説いた法を棄てゝはならない……」

「阿難よ、汝みずから己れを灯とせよ。」これを撫り所として、他を撫り所としてはならない。法を灯とし、法を撫り所として、みずからこれに皈依し、他を撫り廻として、他に皈依してはならない」

この最後の言葉は、釈尊の有名な教えとして、今なお多くの人々に語り伝えられています。

休みたいと思う」

と申されました。この言葉は、

その後の旅路の上でも、屢々用い

られた言葉ですが、そうと聞いて

阿難尊者は、急いで林の中に入り

眺めの美しい所を探して、座を一

樹の下にもうけました。

釈尊は喜んで、そこに坐られ、

深い静かな三昧に入られました。

そして暫くして、

「阿難よ、ビサーリの里も楽しく

インド十六ヶ国そのもの町も

村も皆楽しい。キレン河は黄金を

出し、園浮提（えんぶだい）——全

世界）の大地は絵のよう美しい

…………阿難よ、四神足の人は、

一劫、もしくは半劫の間、寿命を

こゝに留めることが出来る」

と三度までも、ねんじろに申さ
れました。

然し阿難尊者は、釈尊の意を汲
むことが出来ず、たゞ默念として
いました。

この默念としていたことが仏滅

後、仏教徒の中で大問題となり、

「なぜその時、阿難は釈尊の寿命

一劫を、乃至半劫でも留められる

よう、お願いしなかつたのか」

と阿難尊者が大衆に責められる

こととなるのですが、この時、た

だ黙念としていた阿難尊者に対し

て釈尊は、

「阿難よ、静かに考るがよい」

と言い残され、みずから立つて

他の樹の下へ座を移されたのです

その刹那でした。悪魔がやつて
出で、

「世尊よ、もはや速かに涅槃に入

られるがよいではありませんか。

世尊の教化は既に終りました。今

まさに此の世を去るべき時ではあ

りませんか」

と、いざないました。釈尊は叱

咤しました。

「去れ悪魔よ、私には能く時が判

つている。まだ涅槃に入る時では

ない。私は、私の弟子、及び法界

の一切衆生が、すべて仏法をうけ

又は仏法をうける因をなし終るま

では、断じて涅槃には入らない」

悪魔は更にいざないました。

「世尊よ、世尊が曾ってニレンゼ

ン河のほとり、菩提樹の下では、は

たではありませんか。

じめて悟りを開かれた時、私は世尊の下に詣でて、直ちにネ槃に入られるように、とおすゝめしました。その時、世尊は今と同じよう

にへ去れ悪魔よ、と申されました。そして、

△私はみずから時と知つて、まだネ槃に入るわけにはいかない

私は私の弟子たちが集い来つて、天界も人間界も悉くの世界が、あまねく如來の神變を見るようになるまでは決してネ槃には入らな

い、
と仰せられました。然し世尊よもや大衆は集い、天界も人間界も、あまねく如來の神變を拝し

今こそ、誠に絶好の時です、何故、すみやかにネ槃に入らないのですか

「去れよ悪魔、仏陀はみずから時

を知つて、今後三ヶ月を経て私はクシナガラ城外の沙羅双樹の下でネ槃に入るであろう」

悪魔は小躍りました。

「仏の言葉には、いつわりはないネ槃に入るのも、もう遠いことでない」

たちまち悪魔の姿は、かき消えました。世尊は再び深い三昧に入

り、静かにネ槃の境を禦ぜられました。そして独白されるよう、

「三有を脱ることは、あたかも

鳥が卵を破つて出るよう安らかのことである。今、我が心は平安である。敵を破つて戦場より帰る

設旋将軍にも似た心地である」

その時にわかに大地が六種に震動しました。阿難尊者は驚いて

世尊のそばへ走り来つて尋ねました。

「世尊よ、今、大地が震動したのは、どういうわけですか。もしや世尊がネ槃に入りましたものではありますまいか」

「阿難よ、私は三月をすぎてネ槃に入るであろう」

世尊は初めて滅度の時期を告げられました。阿難尊者は驚き悲し

みながら、

「世尊よ、願くは我等をあわれみたまひて、いま一劫だけ、或は半劫の間でも寿命を留めたまひ、永く天界、人間界の人々をいつくしみ下さい」

と三度まで願いました。

「阿難よ、もはや請うべき時では

ない。私は三月にして涅槃に入るであろうと既に惡魔に告げた。阿

難よ、汝は私につかえてから、私が二重に言葉を使つたことを聞いたことがあるかどうか考へてみるとがよい」

「世尊よ、いまだ曾つて、そういうことはありませんでした。然しながら、

私は、先刻、四神足の人は命を一

劫、もしくは半劫の間でも留める

ことが出来る、ということを聞き

ました。彼でさえそうであるならば、まして自在神通の主である世尊におかされでは、なおさらのことゝ思つて、このようにお願い申し上げたのでござります」

「確かに私は、さつき四神足のことを汝に告げた。然しその時、汝は答えもせず、請いもしなかつた

「然し世尊よ、衆生は久しきらずして、いつくしみ深き父を失うのです。生れたばかりの小牛が、母牛に捨てられるようなものです」

「阿難よ、憂えてはならない。たとえ私が一劫の間、こゝに住することが出来たとしても、会う者は何時しか別れなければならぬ。諸法の姿は皆この通りである。

ず号泣しました。

「仏陀のネハンに入りたもうことは何と早いことであろう。何故かくまでも早いのか」

「阿難よ、悲しんではならない。

三界は皆この通りである。会うた

者は誰一人として別れぬものはな

い」

「阿難よ、憂えてはならない。たとえ私が一劫の間、こゝに住する

然し、たとえこの肉身は亡びたとしても、私が説き残した妙法の法身は、永遠に残るではないか。

阿難よ、私の坐具を持つがよい

今は坊舎へ帰ろうと思う」

釈尊は静かに座より立ち上がら

れました。

そして、その日の夕刻、大衆を集めて釈尊は、三月後に滅度されることを告げました。大衆は驚き悲しみ、五体を地に投じて泣き伏しました。釈尊は再び諸行無常、会者定難の理を説かれ、

「私の説ける法こそ、汝等の師である。能くこの法をたもつ者は、私に仕えることと同じである。私が亡が後も、私が世にあると同じ

ように、この法をたもちて、法にたがわぬがよい」

と、さとされました。この悲報

は、たちまちの中、人から人へと

インド國中に伝えられて行きました。

三つの垢

釈尊の最後の旅は、更につづき

ました。アンバラ村からエンブ村に移り、またその辺の村々をめぐりながら、多く次のようなことを説かれました。

「心には三つの垢がある。欲と怒りと愚かさである。戒は欲の垢を却け定は怒りの垢を除き、慧は愚かさの垢を去る。」

戒定慧の三學こそ、世を教う道である。汝等これによつて、悲しみと憂いと苦しみの本を断つがよ

大地震動の因

やがて一行は、フーカ城へ入り

城の北にあるシシャバ樹の林にいわれました。

静かに黄昏が迫つて来ました。

その中で阿難尊者は、一心に大地の六種震動する因縁について考えていました。

暫くして釈尊のもとに参り、

「世尊よ、大地の震動するのは何故ですか。何の因縁によるものですか」

と尋ねました。釈尊は答えられました。

「阿難よ、地は水によつて保たれ水は火によつて保たれている。従つて火が動く時、水が動き、水が動く時、地が動く。これが地の動く一つの原因である。

次には、道を得た者が感應をあらわそうとして地を動かすことがある。これがその二の原因である。次には、仏が仏力をもつて地を動かすことがある。これがその三である。

阿難よ、如來の秘密神通の力はたゞ地を動かすばかりではなく、天をも動かすものである。これは正法受持の力である。

阿難よ、私は永劫の昔より、功を積み、徳をね累て、この神妙自在の法力を得た。私はすべてを見すべてを知つて感化の及ぼさぬものとてない。

阿難よ、汝もこの道をきわめ、努めて人のために法を説くがよい。仏の世に出現するのは、ウドンバラの花の咲くように甚だいい難いものである。従つてその法もまた説き難い。故に一度聞いたならば能くこれを譲り、これを現して、納めかくしてはならない。

阿難よ、私の滅後に、若し人あつて法を説く者あれば、汝はこれを聞いて、まさに經により、律により、法によつて、それが虚妄で

あるか、眞実であるかを考え、またその本と末とをきわめるがよい。若しそれが経によらず、律によらず、また法にもよつていなければそれは△魔の法▽である。

阿難よ、法によつて人によらぬがよい。若し正法によらぬものでは、その者をして経に入らしめ、律をうけさせるがよい。

若し彼が従わなければ、よろしくこれを退けよ。惡草を除かなければ、よき苗（なえ）はいためられるからである」

夕闇は、ようやく、あたりをおい始めていました。

釈尊の一行は、フヤ城を経、クバの村も過ぎ、やがてハーバーの城に至りました。

そして、曾つて釈尊の教化をうけたこのある鍛冶屋の子、淳陀の所有するハーバー城外の樹園に留まられました。それは釈尊御入滅の前日である二月十四日のことでした。

城内の人々は、総出して釈尊を拝しました。淳陀もまた喜びに堪えず、衣服を整え、釈尊の御下へ馳せ参じ、釈尊の御足を礼して、「世尊よ、御遠路よくおいで下さいました。所で、私に出来ますことならば、御役に立させて下さいませ」

と申上げました。釈尊は淳陀の申出をいたわる様に、「淳陀よ、別の用とてはない。実は私は久しうからずしてネハンの雲にかかる。その故に此處まで汝等に別れを告げに来たのである」と、仰せになられました。淳陀は此の思いがけない言葉を聞いて電撃に打たれた様に驚き、悲しみに因え、地に倒れて、

「仏の此の世に現われる事は難く、仏の教えにあう事は更に難く、恰も、遠くから芥子（けし）の実に針を投げつける様に、また盲の角が大海の浮木にあう様に難しいものが大海の浮木にあう様に難しいもの、と聞いて居ります。顧くは世尊よ、生死の迷いにある私達衆生を憐み給いて、ネハンに入られるのを思い留まられて下さい」と叫ぶ様に切々と懇願しました。

「淳陀よ、三界は無帶である。然し、私は既に三界の苦を離れて眞実を悟り、寂然として林野に安廻し、最早、私には生もなく、老もなく、病いもなく、死もなく、また寿命の尽るということもない。然し、淳陀よ、私は汝や一切衆生を愍み、慈めばこそ、ネハンに入らうとするのである。

何となれば、衆生は常に仏を見れるを以つての故に、情慾の心を生じ、放逸にして五欲に着し、惡道の中に堕ち入るからである。若し私が不滅の滅を示すならば衆

生は私を渴仰、恋慕して、一心に

精進するであろう……

淳陀よ、バラバの鳥は春ともな

れば、皆アノクタツの地に集い来る。その様に、法界の諸仏も凡て

またネハンへ至るのである」

釈尊はこの様にさとされました

淳陀は了解して、

「ではせめて釈尊よ、願くば最後の私の供養を受けて下さいますよ

うに……」

と願いました。釈尊は心よくその願いを許されました。淳陀は喜んで、夜もすがら心を尽して明日の食事を整えるべく、直ちに釈尊の御下を辞して立ち去りました。

宝城の瓦礫

淳陀が去つて間もなく、釈尊は

多くの弟子達に向つて次の様に告げられました。

「諸比丘よ、汝等の中で若し疑いがあるならば、今の内に問うて置くがよい。私は汝等の疑いを次々に解決して後、ネハンに入るであろう……」

諸比丘よ、汝等は仏にあつて空しく時を過してはならない。私は仏陀として無量劫の間、一切衆生のために頭目髄腦、身内手足をも善捨し、布施することを常として

來た。

汝等は放逸であつてはならない

汝等は、み仏の宝城に入りながら瓦礫を持つて帰る様な、愚かな商人であつてはならない」

と、常精進を勧発せられ、更に

「私は今、まことに汝等のために告げる。仏陀の法性は眞実不倒である。汝等は、此の教えによつて

猛々しい道念を奮い起して、無明煩惱の巨岩を打ち碎かねばならぬ。慧日が沈めば、汝等を再び無

明の習に覆われるであろう」

と訓され、次いで、常樂我淨の四頑倒について説かれました。

バラモンの青年

時に、その会座にあつたタラの

村人で、バラモン族の年少の迦葉

が、座より立ち、右の肩をぬぎ、
釈尊を繞つて後、右の膝を地につ
け、掌を合せて、

「世尊よ、如何にすれば金剛の様
な不壞の信が得られましょか。
また何によつて金剛の様な堅固な
力が得られましょか」

と尋ねました。この純なる青年
の、真剣な求道の問い合わせて釈
尊は、
「一切の人々を想うこと、恰も我
が子を想うが如くにして、凡ての
人を平等に護念するがよい」
と答えられました。然し、社会
の矛盾に妥協することを知らぬ迦
葉は、

「でも……」

と口ごもり、更に、
「でも破戒逆説の者に対しては、
どうして我が子を想う様な心を持
つことが出来ましょか」

と尋ねました。そこで、釈尊は
自らの体験を引用して、次の様に
答えられました。

「私には血を分けたラゴラという
一人の男の子がいる。私は且つて
ラゴラを城に残して出家し、成道
後には私の弟子として出家せしめ
た。それは私の唯一無上の財産で
ある正法を、父親の遺産として譲
らんがためである。私は親として
子を想う心は誰人にも劣らない。

然し、迦葉よ、その私にして、
私に接する凡ての人々を想うこと

実子ラゴラを想うが如くであつた
迦葉よ、人ありて、たとえ正法を
誇り、善根を断ち、或は人を殺し
或は邪見に陥ち入り、或は殊更に
好みで戒律を犯す者があつたとし
ても、私が彼等を等しく慈しみ愍
むことは、実子ラゴラに対するの
と、何らの変りないものであつた
迦葉よ、この様な慈しみの心を
持つ時、金剛不壞の信も起り、金
剛の力も得られるであろう」

二月十四日の夜は、次第にふけ
て行きました。迦葉は更に次々に
疑いの解決を求めて質問しました
それは、何時しか、迦葉の心が一
座の大衆の心を代表していたから

です。かの有名な、

法に杯って人に依らされ

義に依つて語に依らざれ

智に依つて識に依らざれ

了義經に依つて

不了義經に依らざれ

という釈尊の教えも、実に此の間に於いて説かれたのです。

濁水の奇蹟

さて、一夜あくれば二月十五日釈尊は約束通り、仏弟子を伴われて淳陀の家に至り、淳陀の心尽して供養を受けられました。

淳陀は自ら食事を釈尊と仏弟子に供え、別に、世も珍らしい栴檀の木に生えた芳しいキノコを煮て釈尊に奉りました。

やがて食事も終り、釈尊は淳陀

の家を出、仏弟子に囲まれながら

「ネハンの地クシナガラ」へと向われました。淳陀も家人と共にその後に隨いました。

行くこと暫し、河のほとりまで、至つて、又もや釈尊は病痛に襲われました。

「阿難よ、私は今、背に痛みを覚える、此處に座を敷いてもらいたい」

阿難は急いで道端の木陰に座を整えました。釈尊はその上に静かに結跏趺坐して憩われました。そして、

「ノドが渇いて来た。阿難よ、河

ほしい」

と申されました。然し、ツイ最

前、この河のすぐ上流を、商人が五百の車を連ねて渡つたばかりなのです。誰が考へても、流れが清いはずがありません。そこで阿難は、

「恐らく水は濁り切つて、飲み給うこととは出来ないございましょう。世尊よ、これより余り遠くない所にカクツサ河があります。そこには何時も清い冷い水が流れています。どうか、そこまで行かれてカワキをいやし、御足も冷されては如何かと存じます」

と申上げました。

然し釈尊はなおも三度、この河

の水を汲んで来る様にと仰せになりました。やむなく阿難は兎も

「世尊よ、何卒私を憐みて、これをお受け下さい」

釈尊の托鉢用の鉢を持つて河岸に行つてみました。水は清らかに澄んでいました。

「私は汝のために、その中の一領と申上げました。釈尊の申され

思わず膝まづいて感泣しました。

「私は汝のために、その中の一領だけを受けよう。他の一領は阿難へ贈るがよい。阿難は日夜私の傍に侍り、今は私の病驅を看護して

いる。病める者と、それを看護する者とに施すことは、大いなる施しを完うすることである」

ホツカシヤは喜んで、一領を釈尊に他の一領を阿難に献じました

「阿難よ、私の体より出る光明が常の光明と異なる時が二度ある。一つは仏道を成したる時、一つはネハンに入ろうとする時である。」

「…………」

「阿難よ、汝今こそ知るがよい。私は今日（二月十五日）の夜半、必ずネハンに入るであろう」

ホツカシヤという青年が通りかかり、この様子をみ、歓喜して釈尊を讃え、自ら信者となる誓いを立てゝ、法衣二領を釈尊に捧げ、

やがて、阿難が清水を鉢に汲んで、釈尊に奉った時、マツラ族のホツカシヤという青年が通りかかり、この様子をみ、歓喜して釈尊を讃え、自ら信者となる誓いを立てゝ、法衣二領を釈尊に捧げ、

に輝き渡りました。阿難は驚いて尋ねるよう。

「世尊よ。私は世尊におつかえ申してから既に二十五年にもなりますが、未だ曾つて此の様な瑞光を見奉った事はありません。これは一体どういうワケでございましょうか」

愁に閉され、慟哭を禁ずることは出来ませんでした。

釈尊はやがて歩み出され、一行はカクツサ河の岸辺に到りました。釈尊は法衣のまゝ清流に沐浴され河より出でて、歩みを岸の木陰に移されました。

その時、あの偉大なる瑞光は、再び黄金色に輝いて、カクツサ河の両岸をまばゆいばかりに照しました。

人々は釈尊のネハンの時の迫つてゐる悲しみも忘れて、此の莊嚴なる瑞光に心を奪われてしまひました。

淳陀への思いやり

やがて釈尊は、阿難が釈尊の沐浴の法衣を乾かすために、少し離れた所に居たため、淳陀に命じて座を敷かせて沐浴後の体を休められました。

淳陀は釈尊の側に侍つていながら、今朝、自分が釈尊にだけ奉つた栴檀のキノコによつて、釈尊が病氣になられたのではないかと、心が咎めてなりませんでした。

釈尊は淳陀の心を観じて、阿難が側へ帰つて来た時、淳陀を退けられて、

「難阿よ、淳陀は何か悔んでいる事があるのではないか」

と尋ねられました。阿難は淳陀の心配事を申し上げました。尊釈

は食中毒の事実を打ち消されて申される様

「嘗つて私が前世に於いて仏としてネハンへ入ろうとした時、矢張り淳陀という青年がいて、食物を供養した事がある。その時の淳陀の功德も、今の淳陀の功德も、まさに等しく、且つ大きい。阿難よ汝の行きて淳陀に対して

「心を禱わすことはない汝の行つた功德は大きく、汝はとこしえに福を得るであろう。世尊は斯く仰せられた」

と、告げるがよい」

阿難は仰せの如く淳陀に伝えました。淳陀は安堵すると共に歡喜しました。

釈尊の学道

しばらくして釈尊は、

「阿難よ、私はまた背がより烈しく痛むのを覚える。私は横に臥したいと思う。座を作り直してもらいたい」

と仰せられました。阿難は急い

で仰せに従いました。釈尊は横臥され、そして静かに三昧に入り給い、暫しあつてから、

「阿難よ、私に七覚分の教えを説いてほしい」と申されました。

阿難は昔つて釈尊が説かれた七覚分の教えを、一言も間違わずに述べました。それは阿難が常に釈

尊のそばにいて、超人的な暗記力を以て、釈尊の教えを悉く記憶していたからです。

釈尊は、阿難の誦誦する音つての自分の教えを、自から反覆するか様に幾度か大きく、深く、うなづかれながら黙念として聴いておられました。

その姿を見た一人の出家は、感極まつて嗚咽しました。

「アア大いなる釈尊よ！世尊はこ

の上学ぶこともない無上正覚不退の仏陀であらせながら、なおも弟子に説かれた教えに学ばれる……しかも、ネハンの直際に……しか

も病苦をも忍ばれながら……

アア正法とは、かくも尊く、仏業

浮陀の死

釈尊は阿難に、

「阿難よ、私は今からクシナガラ城外のキレン河のほとりにある沙羅雙樹の間へ行こうと思う」

と申されました。

釈尊の聖なる顔は、大雪山ヒマラヤの様に澄み切つて莊嚴そのものでした。

一行は静かにカツクサ河のほとりを去り、やがてキレン河を渡つ

の修業とは、かくも謙虚に、そしてかくも怠りなくあらねばならぬのか。……大いなる世尊は自ら身を以つてそのことを、我等のために示されたのである……」

て、沙羅樹の林の外まで到りました。

沙羅樹の林は、クシナガラ城外のキレン河の岸角にあつて、河は林を三方に廻つて流れていきました。時に、鍛冶屋の子、淳陀が進み出て、

「世尊よ、私は世尊の御入滅を見るに堪えません。私はこゝに於いて滅度しようと思ひます。そして愛もなく、憎みもないかの限りなき功德の海に到るでありますよ」

と申し上げました。世尊は静かに授記せられました。

「時もよい。汝のなすべき事は、既に終つた……」と。

淳陀は釈尊の前で、恰も灯の消えるかの様、泰点として息を引き取りました。それは、釈尊の十大弟子の一人智慧第一の舍利弗に次ぐ二人目の殉死でした。釈尊は淳陀の死をねんぐろに弔われました

そして、阿難に向つて、
「阿難よ、汝、彼の林の端に沙羅雙樹の並んでいるのを見ることが出来るであるう……。汝そこへ行って、座を敷き、私を北に枕して、臥かせてくれ……。私はいたく疲れた。今日の夜半、そこで私は将にネハンに入るであろう」

と申されました。
「世尊よ、仰せの通りに準備が出来ました」

阿難は涙をふるつて、沙羅雙樹の下に到り、その場を清らかにはらい、水をそゝぎ、法の如くに座を設け、帰つて釈尊に申し上げました。

釈尊は仏弟子を従えられた、ハバーレ城より此の林に至るので唯數里ばかりの道程を、二十五度ま

天の奇瑞よりも

いよ／＼ネハンの時刻と場所と

が定められたのです。長い間、ネ

ンハ告別の旅に随順して來た多く

の仏弟子達は、その言葉を聞いて寂として声なく、皆地に頭を垂れ

溢る、涙も止められずに慟哭しました。

でも憩われたような病める体をして、「最後の歩み」をされました

そして沙羅樹の林に入り、阿難の設けた座のそばに到つて、静かに

頭を北にして西を向き、右脇を牀につけられ、足を重ねて、横に臥せられました。時に、天采がなり

響き、歌が湧き、沙羅の木々は時ならぬ花を開いて、花弁は雨の如くに釈尊の上に降りそゝぎました

その花弁は白い鶴にも似ていまし

た……。

釈尊、阿難に問われるよう

「阿難よ、諸天や、樹神が、私を供養するが見えるか」

「はい、いかにも見えます」

「然し……その様なことは、真に私を敬い、私に報ゆる道ではない」といへ
「…………では世尊よ、どういうことか」と真に仏を敬い、仏に報ゆる道でございましょうか」

「阿難よ、そして我が諸々の弟子達よ……真に仏を奉じ、真に仏を

敬うということは、老若男女をとわず、貧富貴賤をとわず、法に住み、法に歩み、ことの大小となく

法によつて行うことである。

それ故に阿難よ、そして我が諸々の弟子達よ……

私は順い、私に報いんと思う者は必ずしも香華伎樂を以つてしまふてもよい。即ちハ願わくば

我をして法に住み、法に歩み、こ

と大小となく法によつて行わしめよ」と急じながら勤めるがよい。

これ即ち第一の供養である」

と論されました。

三 宝 常 住

その後、釈尊は、

「汝等の中に、若し、疑いがあるならば今の中に、自由に問うがよい」

とされて、次々に弟子達の質問を解決されて行かれました。

阿難も質問致しました。

「世尊よ、世尊が世にあらるれば天下の清徳の人々や、篤行の人々も来つて世尊を拝するでありましよう。そして私は世尊のおそばに

待つて法を聞き、福を得ることが

出来るでありますよう。然し、世

尊がおかれにならるれば、最早

その様な人達も来ることはありま

せん。それでは私達は一体どうし

たらよいのでございましょうか」

「阿難よ、心配することはない。

私の滅度の後は、私が生れたカビ

ラのルンビニー園を念するがよい

また私が成道したニレンゼン河畔

の菩提樹の下を念ずるがよい。ま

た私が初めて法輪を転じたハラナ

の鹿野苑（ロクヤオノ）を念ずる

がよい。更に私がネハンに入る地

である此のクシナガラの沙羅樹の
國を念するがよい。そうすれば汝
等は等しく幸いを得るであろう」

阿難は更に尋ねました。

「世尊の御在世の時と、御入滅の

後とでは、世尊を供養し奉る功德

に違いがありますようか」

「違ひはない。また永遠に異なる所

もない。阿難よ、仏陀は不滅であ

る。そして、仏陀を見るものは正

法を見、正法を見るものは聖衆を

見る。此の三宝は常住であつて、

而も一体であり、そして、そこへ

そえての人々の帰依所であるとい

うことを忘れてはならない」

転輪聖王の葬儀

阿難は更に、

「尊が御入滅された世後は、一体

どのようにして葬儀をすればよろ

しいでございましょうか」

と尋ねました釈尊の答えられる

様、

「阿難よ、汝このことのために心

をわざわざしてはならない。たゞ

道を護るがよい。己のために勤め

己の善根のために、汝の全身を捧

げるがよい。また私に聞いた所を

樂しんで人のために説くがよい。

私の遺骸は諸天や、王や、清信

の士、女の中から賢者が来つて、

必ず厚く葬るであろう」

「——では、彼等はどういう方法

を以つて葬り奉るのでございまし

ょうか」

「諸王の中の王、即ち転輪聖王を

葬る儀式で、私を葬るであろう」

「——それは、どの様な方法で」

ざいましょうか」

「先づ遺骸を湯で洗い、綿を被う

て、黄金の寝棺に入れ、香油をそ
そき、薫しき香で包み、そしてこ
れを焼いて舍利を收め、塔を建て
るのである。

道行く人々は末代にまで、この
塔を礼拝し、花を捧げ、香を供え
て、功德を積むであろう。これが
転輪聖王を葬る儀式である」

聞き終つた阿難は、こらえにこ
らえていた悲しみに堪え切れず、
釈尊の傍を駆け去つて、沙羅樹の
枝に取りすがり、

「ア、釈尊は御入滅される……
今日から私は、誰のために、朝に

水を汲み、夕に禪を整え、またそ
の御足をすゝぎ申せばよいのか……

……」

と嗚咽しました。釈尊は阿難を
呼びよせられて、

「阿難よ、私がネハンに入つたか
らとて、解脱の機会を失うと思つ
て悲しんではならない。聞もなく

汝の上にも解脱の日がおとずれる
からである……」

阿難よ、私は世の父であり、世
の友である。そして、私は父とし
て、友として、なきねばならぬこ
とは凡てなし終つた。

この上は阿難よ、私が成道以来
説き来つた教えを師と頼んで、摩
訶迦葉と共に、世を導き、大いに

仏事をなすがよい。汝は必ず解脱
する。そして、正法は広く流れて
人天をめぐむであろう」

と諭されました。阿難は晴々と

した心地して、最後の質問をしま
した。

大 地 の 恩

一世尊よ、此処から余り遠くない
所にビシヤリ城があり、王舍城が
あり、また舍衛城もあり、いづれ
の国も豊かに民は栄え、仏法も盛
んに行われて居ります。それにも
かゝわらず、何故これらの諸城に
は行かれなくて、わざ／＼片田舎
のクツナガラに来て、ネハンに入
られようとされるのですか」

釈尊は静かに答えられました。

「阿難よ、その様なことを用してはならない。賤しき者の家でも、若し王者が訪ねたならば世間は貴ふであろう。安い薬でも病いがいやさるれば、人々は喜ぶであろう

阿難よ、微妙の功德はこのクシナガラの林に満ちている。此處は曾からだ……前世に於いて、私は此の国の王となつていたことがある。時に城は栄え、御稟威は盛んに、人民は皆頗つていた。然し私は

△栄華も久しく保つことは出来ず身は朽つべき器である。たゞ道のみが真であり、諦かにこれを見る

者のみが足ることを知るのだ」

と思ひ、王位を捨てゝ、偏に道を修めて來た。顧りみると、こういうことが七度もあつた。それ故私は既に七度までも骨を茲に置いたのである。此の地は斯くまでも私に宿縁がある。今此處に來つて

と申されました。阿難は直ちに

と云ふ。此の△大地の恩△に報いネハンに入ろうとするのも、まことに昔の此の△大地の恩△に報いようとも願うからである……」

これを聞いた仏弟子達は、等しく三世につらなる天地の恩と、その因縁の深きに、痛く胸を打たれました。

やがて釈尊は阿難に

「汝、城へ行き、諸々の市民に向つて——今日の夜半に仏陀はネハ

ンに入られる。若し、人生について疑いがあるならば、急いで齒で質問するがよい。時を失つて、後に悔ゆることがあつてはならぬ——と告げるがよい」

と申されました。阿難は直ちに一人の比丘をつれて城へ赴き、市民に広く釈尊の命を伝えました。人々は驚き悲しみ、すゝりなく声は巷に満ち、それを聞いた国王は、王子アシンに、「林の園でネハンに入られるということは、余りにも恐れ多い。国王の宮殿でネハン遊ばされる様にお願いして来てくれ」と頼みました。王子アシンは沙羅樹の林に駆けつけて、阿難を通

して父の願いを釈尊へ伝へました

釈尊は、厚く国王の申出を感謝

されつゝ、沙羅樹の林の宿縁を説

いて、鄭重に辞退されました。

王は泣いて、布令を市中に出し

老若男女の市民を悉く従えて、直

ちに沙羅の林に詣でました。時に

二月十五日の日は静かに暮れて行

きました……。

仏陀と共にいる者

阿難は、これ等の人々をして、

「生れて死なないものはない。私

は今日から尽きることのない清ら

かな処に到るであろう。そこは常

に静かであり、とこしえに要いは

一人一人釈尊に礼拝させていては

夜を徹しても果されない事を知り

一緒に、礼拝せしめようと思つて

「世尊よ、クシナガラの人々が今

世尊の膝もとに拝して居ります」

と申上げました。釈尊はねんこ

ろにこれをねぎらわれました。

王は進み出て、

「世尊よ、願くば最後の御教えを

お示し下さい。私達は謹んで行う

と申上げました。釈尊はおこそ

かに、

「生れて死なないものはない。私

は今日から尽きることのない清ら

かな処に到るであろう。そこは常

に静かであり、とこしえに要いは

除かれている……。

汝等は少しも私のためには悲し

んではならない。悲しむべきは自

己の行いの至らざることである。

諸行は無常である。無常であれ

ばこそ、速かに前非を悔い改め、

悪を遠ざけ、来るべき善を修め、

徳を積みて、賢者に親しむがよい

人命は得難い。當に万民を憐れ

まねばならない。明かな者を責び

愚かな者を赦し、乏しき者に施し

足りないものに恵んで、民をみる

こと我が子の様にして、政りることを

正し、利を同じくして、共に薫し

むがよい。これこそ永遠に榮ゆる

幸いの道である……。

世には諸々のよこしまがある。

汝等は必ず自らを愛さねばならぬ

い、この様になれば、たゞに私を

見ることが出来るばかりではなく

諸々の苦惱の網より離れることが
出来るであろう……。道を行ふ本

は必ず心にある。そして必ずしも私を見ることが要しない。恰も、

病人が医者に逢わなくとも、定め

によつて薬をのめば、病苦は怒ち

除かれるのと同じである。若し、

私の教えの通りに行わないならば

私に逢つたとて益ないことである

たとえ私と一緒に坐つていても、

私を去ること遠いであろう。若し

また、道を道のまゝに行うならば

たとえ私と遠く離れてはいても、

これこそ常に私に最も近いものと

しなければならない……。汝等は

心を修めるがよい。放逸であつて

はならない。世に諸々の惡があり

苦が迫つてゐる。汝等をして、夫

々に天寿を全うしめ、苦より脱れ

しめたい……。これが私の切な
る願いである」

と説かれました。

我が子ラゴラよ

時に、釈尊の実子ラゴラは、

「私に何の堪ゆる力があつてか、
父仏陀のネハンを見奉る事が出来
えようか」

と、沙羅の林を出て、東北の方

へ走り去り、父を憲つては、涙に

むせんでいました。然し、

「夜が明くれば、再び満月が諸々

の星に囲れた様に、諸々の弟子達

に囲まれて、み教えを説き給う我

が父、仏陀を見奉ることは出来な

いのだ」

と思い返して、沙羅林に入り、
釈尊のそばにぬかずきました。

釈尊は大慈悲のまなこをラゴラ

にそゝぎ、我が子に對して最後の
言葉を優しく告げられました。

「我が子ラゴラよ！……。

歎くことはない。汝は子として父

になすべきことをなした。私も父

として汝になすべきことをなした

我が子ラゴラよ！……。

私と汝とは、常に共に居て、共

に凡ての人々のために、畏るゝこ

となく、正法を修し、また怨みも

されず、また害をもなさなかつた

我が子ラゴラよ！……。

私は今、ネハンに入れば、更に
他の人の父とはならないク…汝も

また必ずネハンに入つて、更に他の

人の子とはならないであろう。

我が子ラゴラよ！……。

仏陀の正法は常住である。汝、

宜しく無常転滅する凡てのものを捨て、唯偏に不滅の解脱を求めるがよい……。

我が子ラゴラよ！……。

これが父仏陀の最後の教えであ

る」

最後の仏弟子

中印度の北方、マツラ族の住むクシナガラの町に、スバドラという異学者が住んでいました。

スバドラは年既に百二十才、学

識は博く、徳望も高く、人にも厚

く重んぜられていました。

二月十五日の夜半、フト眠りか

らさめたスバドラは、内に一人と

して家人も居らず、起きて外を見

れば、夜半というのに、その夜に

限って、何處の家にも光だけは焜

々とついていて、しかも、町中は

シーンと静まりかえっているのを

不審に思ひ、外に出て近所の人々

そのワケを尋ねてみました。

その人は答えました。

「尊者スバドラよ！」今夜、仏陀

釈尊が入滅されるのです。町中の

人々はそれを悲しんで、今郊外の

沙羅樹の林へ集つてゐるのです」

と、聞いたスバドラは愕然とし

て、

へオ、あの氣高き仏陀釈尊が入

滅されるといふのか……諸々の聖

典をみると、仏陀の世に出現し給

うことは、ウドンバラの花の咲く

様に極めて稀であるといふ……

私の心には、悟りの道に対しても

未だ疑いが残つてゐる。此の最後

の疑いを解いてくれる人は、仏陀

をおいて外にはない……。然るに

その仏陀さえも、最早、入滅され

ようとしている。私は仏陀の下へ

駆けつけて、最後の教えを請わね

ばならない。時に遅れてはならぬ

……」

と、トツサに決意し、取るもの

も取りあえず、直ちに沙羅樹の林へと急ぎました。

タマ／＼沙羅樹の林の外には、

は、

うとして来たのではない」と仰せになられました。

阿難はスバドラを導いて釈尊の

み前に到りました。スバドラは無

と三度も要願しました。阿難は生のお願いでござります」

心を固くして、遂に許しませんでした。

「仏陀よ。お尋ね申上げたい事が

ござります。何卒、質問する事を

お許し下さい」

と、申しました。釈尊は静かにお

お呼びになり、「どういうことであるか」と聞かれました。

「阿難よ、私の最後の弟子をさえ

切ってはならない。スバドラを許

して、私のそばえよこしておくれ

私はスバドラにあおうと思う。ス

バドラは心正しく、智慧明かであ

がいて、皆それ／＼に自分自身を

最上の師と称して、自分の説く所

のみを正見だと言い、他は凡て邪

釈尊の常隨の弟子、阿難がいました。スバドラは阿難の袖に取りすがつて、「仏陀がネハンに入られるといふことを聞いて駆けつけて参りました私には仏陀によつて解いて頂かなければならぬ最後の疑いが残っております…。どうか、この疑いを解いて下さる様、仏陀にお取りつけを願います」

その時、釈尊は、此の二人の押し問答を聞かれて、静かに阿難をお呼びになりました。「阿難よ、私の最後の弟子をさえ切ってはならない。スバドラを許して、私のそばえよこしておくれ」と、申しました。釈尊は静かに「どういうことであるか」と聞かれました。

スバドラは思いつめたように「仏陀よ、世の中には多くの学者がいて、皆それ／＼に自分自身を最も優れた師と称して、自分の説く所のみを正見だと言い、他は凡て邪と制止しました。然しへスバドラ

見だと主張し、己れの行のみを悟りの因と名付け、他の凡ての行を

迷いの因とけなして、互に相い争つて居ります……。

仏陀よ、一体いづれが眞実なのでございましょうか？…………

また、いづれが悟りの因行であり、いづれが迷いの因行なのでございましょうか？

……果して、彼等は一切の眞実を知つてゐるのでございましょうか？…………それとも、彼等の未だ知らない真理が、他にあるのでございませんか？…………どうか、この一点の疑いをお解き下さい』

と一気に尋ねました。

釈尊は優しく答えられました。

「スパドラーよ、その様に煩わしく問うてはならない。そういう問い合わせ益のないことである……。ス

パドラーよ、人の説に迷つてはならない。私の説いた法を、説いたままに持つがよい。この道こそ悟りの因であり、他は凡て迷いの因である。

彼等は邪見を持つてゐる。そして現世と未来世とに亘つて、自らなした報いを自ら受けねばならぬという、三世の因果も信せず、

彼等は邪見を持つてゐる。そして現世と未来世とに亘つて、自らなした報いを自ら受けねばならぬという、三世の因果も信せず、

されば、彼等の行は、いざれも彼等の禪定は邪定である。

されば、彼等の行は、いざれも悟りの因ではない。

スパドラーよ、……昔、私が未だ王城にあつた時、世の中の凡ての人々は、彼等の説に迷わされていました。そこで、私は王城をすてゝ道を修め、三十五才の時、尼連禪河

そして、いつわり、おもんねり、へつらつてゐる。

彼等は邪な業を犯してゐる。そして、妄りに殺し、妄りに取り、また姦通してゐる。

彼等は邪な生活をしてゐる。そして、悪をやめず、善を行わない

彼等は邪念を持つてゐる。そして、常に樂を貪り、賢者を憎む。

その思いは、欲と怒りである。

彼等は邪な言葉を犯してゐる。

のほとり、菩提樹の下で悟りを開いてより、正しく見、正しく思い正しく語り、正しくながれ、正しくはからい、正しく愈じ、正しく心を定むるの道を宣説して來たスパドラーよ……人々は業が尽きて苦が尽きると思つて。然し実はそうではないのだ。煩惱が尽きてこそ、業が尽きるのである。スパドラー……若し、業の因縁を断つことによつて、悟りが得られるものとするならば、凡そ過去の一切の聖者は、恐らく悟りを得ることとは出来なかつたことであろう何となれば、人間の業には始めも終りもないからである。

始めて此の恐るべき業さえも能く滅することが出来るのであるスパドラーよ……若し、苦行によって道が得られるものであるならば、一切の畜生も悉く道を得るであろう。

されば、先づ自らの心を調伏し身をも調伏するがよい。こゝにこそ、眞の解脱の因があると知らねばならない。

スパドラーよ……如来は、實にこれ一切種智である。疑いがあるならば更に問うがよい。私は決していとうことはない……」

スババドラの死

これを聞いたスパドラーは、「佛陀よ、初めて能く解ることが出来ました。最早、疑いもありません。私は今日只今より、今までの道をして、仏道を行じようと思ひます。どうか堅みて私の出家をお許し下さい」

と、願いました。

釈尊は即座に、この百二十才の老学者スパドラーの願いを許されました。スパドラーは直ちに髪を剃り落し、袈裟をつけ、志しを尽して釈尊の御教えを心に念じました。心は明月の様に清浄に澄み切つていました。

「阿難よ、私は今から四十五年の」

と仰せられました。

昔、最初に阿若橋陳如（アニヤキ

ヨウジンニヨ）を清廻し、今は最

後にスバドラを済度し、度すべき

者は皆既に度し終つた。今より後は、汝等は互に私の教えを相い伝えるがよい。

阿難よ、スパドラーは異学者では
あつたが私は彼の善根の熟してい
ることを知つて、許して仏道に入
らしめたのである。

若し、私の滅度の後に、諸々の異学者が来つて、仏道に入ることを

求むるならば、汝等は四ヶ月の間
これを試みて、その志しを察し、
その行いを観てから、その後に、
仏道に入ることを許すがよい」

咳するものとてありませんでした
いよ／＼釈尊は、普く諸々の仏
弟子のために、最後の教えとして

いよ／＼眾尊は、普く諸々の仏弟子のために、最後の教えとして法のカナメを説かれました。

釈尊の最後の梵音声は、静かに

そして静かに……大地にも浸み通

り、沙羅林の木の間をも抜けて、

廣く……また廣く……虛空の大法

「ええ、二三、或は四二四三」

女等は私が減衰するを見て、正

法は此處に絶えたと思つてはなら

懺愧の衣

ない。

私は汝等のために戒を定め、正法を説き來つた。汝等、私の城度

の後に於いても、これを敬つて、

闇の中に燈を得たるが如く、貧者

の宝を得たるが如く、私が世にある時と同様に、受持、擁護して宣布するがよい。

そこに私は生きている……。

汝等は、互に小さな欠点や、頭きがあったとしても、あはきつて争うことなく、寛容と敬愛との心を以つて、共に尊き合い、大過に陥る事のない様に協力するがよい……」

仏弟子達は、深く頭を垂れ、限りなき悲しみの中にも、釈尊の最後の説法を、一言も聞きのがすまじと、聞き入つていました。

釈尊のねんじろなネハンの声はなおも続きました。

「汝等、世事に交わり、呪術を行

い、仙薬をもつてあそび、ヨシミを貴人と結んで親しみ狎れてはならない。また瑕をかくしたり、敢て異相を現わして、衆を惑わしてはならない。衣服、飲食、臥具、

湯薬については量を知り足ることを知つて、徒らに蓄えてはならぬ。

汝等、我の弟子達よ……

怒るなかれ、てらうなかれ、たかぶるなかれ、……

汝等、自らの剃髪した頭をなでてみよ、既に飾りをして、染衣を

まとい、鉢をもつて行乞し、食を受け歩くのは何のためであるか……

忍辱精進のためではないか……

汝等、人間の五根は心を中心としているということを弁え、必ず能く自らの心を制しなければならない……。

汝等、情眠のために一生を空しく過してはならない。無常の火は世間を焼いていく……

覚めよ！煩惱の賊は常に人の隙

心の畏るべきことは毒蛇、悪獸

兇賊よりも甚しい。大火の盛んなることも喻えにならぬ……されば

汝等は必ず進んで自らの心を折伏するがよい。

汝等、我が弟子達よ……

汝等は必ず進んで自らの心を折伏するがよい。

ばマムシが汝の部屋の中に睡つて
いるようなものである。

汝等速かに、持戒の鉤を以つて

これを除くがよい。マムシが未だ
除かれない中に安睡する人は、無
慚の人である。

憲愧の衣は一切の莊嚴に勝る。憲
愧は鐵の鉤の如く、能く仏道にも
とる行為を制する。憲愧は持戒の
道である。

故に、常に憲愧の衣をぬがぬ様
にせよ。憲愧を離るれば諸々の功
徳を失う。憲愧は一切の惡を制し
憲愧は一切の善を生ず。憲愧を知
らぬ者は諸々の禽獸に等しい……」

釈尊の御教は、一言一句、人々
の肺腑を貫いて行きました。

よき道案内者

釈尊は更に、正念について説か
れました。

「我が友よ、そして我が弟子達よ
汝等は正念を求めなければなら
ない。正念は、汝等のよき友であ
り、よき護り手である。常に正念

漏らさぬ様にするがよい」

にあれば、世に亂れ溢れる諸々の
煩惱の賊も、入る隙はない。され
ば汝等必ず正念をおさめるがよい

若し、念力が強ければ、道をきて
されば、汝等は、よく聞き、よ
く思い、よく修むる智慧明かなれ
ば、肉眼であつても、これを明見
そなわることもないであろう
の人という……。

汝等、凡智質（サカ）しく、論
義をもてあそんではならない。戯

ある。心が定であれば、能く世間
の生滅の相を知るであろう。故に
汝等は常に勤めて定をおさめるが
よい。定を得れば心は散らぬ。汝
等、よき禅定によつて智慧の水を

「如米の智慧は、生老病死の大海上
を渡る大船であり無明の闇を照す
大燈明一切の病いの良薬、煩惱の
巨木を切る斧である。

論（ケロン）をすれば、心は乱れる。されば戯論を離れて、寂滅の薬を得るがよい」

と説かれました。次いで、

「私は、不放逸によつて悟りを得ることが出来た。汝等も、私の説いた正法を、不放逸によつて行するがよい。

私は良医として、良薬を人々に与へて來た。これを知つて飲まないものは良医の咎ではない。

私はよき道案内者として、人々をよき道へ案内して來た。これを見つけて行かないのは、導く者の咎ではない……」

と仰せられ、更に、「未だ疑いがあるならば、早く問

うがよい。秘かに疑いを懷いていて、決定が得られないということがあつてはならない……」

釈尊は三度、この様に仰せられました。一座の衆、誰一人として

声を發する者はありませんでした

一 人 行 ク 者

その時、天眼第一の仏弟子アナリツ（別名—アヌルダ）が、人々の心を察して、

「世尊よ……たとえ月は熱くなり、太陽は冷たくなることはあります。ましても、仏陀の教えは永遠に変わることはありません。

世尊よ……この諸々の人々は

ている者は最早一人もございません。唯……こんなに早く御入滅されるのが、堪え難く悲しいのでござります」

釈尊の仰せられる様、

「悲しまぬがよい。化縁の尽くる時が來たのである。たとえ、私が

此の世に百千万年、生きながらえるとしても、その時が来れば、また必ず別れなければならぬ。会う者は必ず別れる、これが此の世の常である、

たとえ私が此の世に、なお久しく述べたとしても、私の教えはこの上、更に説くべきこともなければ、また異なることもない。

私は、常に千数百人の仏弟子に

ことが出来るであろう……。」

てネハンに入りたい……」

囲まれながら、しかも独りで語り
独りで歩いて来た。そして、法界
の一切衆生に対して、既に度すべ
き者は度し、未だ済度される者
には、悉くまた既に済度さるべき
因縁を与える終つてゐる。

我が友よ、そして我が弟子達よ

今より後は、汝等唯一心に此の

法を持ち、行じ、世々に相い伝え

て行くがよい。されば、若しは

園の中に於いても、若しは林の中
に於ても、若しは木の下に於ても

若しは僧房に於いても、若しは山
谷駄野に於いても、しかも実には

減度せず、常に此處に住して法を
説く久遠の佛陀——私の姿を見出す

慈愛に満ちた釈尊の教えは、限
りなき光明として悲しみに閉ざさ
れた人々の心に、照り輝きました

最後の懺悔

時に釈尊は、普く諸々の大衆を
かえりみて、静かに尋ねられまし
た。

「私の八十年の生涯に於いて身、
口、意の三業に亘って、私が気付

かなかつた過ちがありはしなかつ
ただろうか……」

「世尊よク……世尊に微塵も過
ちがあるはずはございません……」

と、一同口々に申上げるや、悲
愁と感動との涙も交々に、他に打
ち伏して感泣しました。

やうあって、釈尊の仰せらるゝ
もらいたい……私はそれを懺悔し

釈尊は、不世出の佛陀であらせ
られながら、しかもネハンの眞際
に於いてござえ、更に自己をぶり
かえられ、弟子にもたずねられて
懺悔しようとされたのです。

釈尊の此の謙虚な……余りにも
謙虚な深い心に打たれた仁弟子達
は、入滅別離の悲しみに、これまで
堪えて来た眼底の紅涙、一度に涙を切り、

よう、

「汝等、暫らく静まつて欲しい」

もの言つてはならない……
時が来つた……

私は滅度するであろう……

諸行は無常である。汝等、不放逸
によつて勤めるがよい……

これが、私の最後の教えである」

かくて、釈尊は、再び聞くこと
もない眼を深く閉ぢ、寂然として
厳かな禅定に入られました。

四辺は、寂として声なく、天地も

息づまる様な、悲しい一刹那が過ぎ
ぎてゆきました。

阿難は、釈尊の御聖体が、最早
微塵にも動かれないのを氣遣つて
涙ながらに、

「世尊は、既にネハンに入り給わ
れたのですか」

と、アナリツに尋ねました。

アナリツは答えました。

「世尊は未だネハンには入つてお
られない。湛然としてお体の動か

されないのは、正に滅尽定に入つ
ておられるからである」

と……そして、やゝあつて後、
深い沈黙の中に、アナリツは、

「世尊は、只今、御入滅になられ
ました。」

ました。

時に、大地は六種に震動し、天

の鼓はなり響き、沙羅樹の花は雨
の様に、釈尊の聖体に降りそゝぎ
ました。了

了

鷺峰七月号

昭和四十二年

第五卷
通卷第三十八号

定価五十円

送料二十五円

昭和四十二年七月五日

印 刷

昭和四十二年七月十日

發 行

編集兼發行人

山梨県身延町波木井三区醒悟園本妙庵

日 高 白 象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

發行事務所
山梨県身延町波木井三区四一二五
鷺峰會

電話（身延山）四五九番
振替（甲府）二〇九三番

誌代
半年分 四五〇円
一年分 九〇〇円
三年分 三〇〇〇円
（送料共）
（分納可）